
微笑みの詩

ここたそ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

微笑みの詩

【Zコード】

Z7833Y

【作者名】

こじたそ

【あらすじ】

スーパー店に勤務する西浦詩衣が、小学校のクラスメート後藤篤紀と偶然再会し自然と付き合うことになる。
しかし篤紀には忘れられない女性がいた。

2人の女性の間で気持ちが揺れ動く篤紀と、篤紀の全てを受け入れようと懸命になる詩衣のラブストーリー。

空白

8時45分。一人暮らしをはじめた時に買った、お気に入りのシヨツキングピンクの目覚まし時計が今日も鳴る。

寝ぼけた目をこすり、天井を見上げる。

レースのカーテンから口差しがせしむのを何となく眺めている。ふと我にかえる。

そうだもう彼はいないんだ…

毎朝自分に言い聞かせるのが、知らぬ内に朝の日課になっていた。空っぽになつた、ベッドの左側を少し眺めた後、詩衣は珈琲を入れるためにリビングへと向かつた。

通勤ラッシュが少しよさまつてきたころ、詩衣は埼京線に乗り新宿へと向う。

4両目にある2番目のドア付近の空席、ここが定位置だ。

平日だというのに、人であふれかえっている改札をぬけ甲州街道を10分ほど歩くと見えてくるそのビルの1階と2階が詩衣が勤務しているスーツ店だ。

少し古くなつたそのビルの裏口からエレベーターに乗り2階にある従業員の休憩室へと向う。

少し遅れてやつてきた、同期の大川知里おおかわちりに声をかける。

「おはよう。昨日話してたワンピース可愛いの見つかつた?」

「全然だめ。このままだと友達の結婚式に来て行くやつみつかんない。ね!次の休日探す

の付き合つて…」

2年前、地元の青森から就職のため上京してきた詩衣にとって、同期の知里ははじめてできた東京での友達だった。以来、知里とは仕事の話からプライベートなことまで何でも相談できるよき仲だ。

こんな知里と毎朝他愛もないことを挨拶代わりに話すのが詩衣の楽しみの一つだ。

おしゃべりもほどほどに、30分ほど朝礼を終えると店内は開店準備に追われ各々が持ち場につく。

詩衣が清掃している焦げ茶色のフローリングの階段を少し小走りに店長が下りてゆき、自動ドアのスイッチを入れる。

開店前から待っていた客がちらほらと店内に吸い込まれていく。その客を笑顔で迎えることから、詩衣の毎朝の業務が始まる。

その日もそのように平凡な毎日がスタートした。

この時は想像もしていなかつた。

その数時間後に彼に再会することを…

予感

後藤篤紀は、飯田橋にある医療器機メーカーに勤めていた。社員は約300名ほど。その中でも営業を担当している篤紀は、日々都内の医療機関に自社商品の売り込みに通っていた。

その日は9月も下旬だところに、やけに蒸し暑い日だった。

…のびてきた髪の毛のせいだらうか、地元の青森じゃ考えられない暑さだな…

そんなことを考えながら、篤紀は新宿にある小さな個人病院へと向かっていた。

新しく開発された心電図の導入をあっさりと断られてしまい、踏んだり蹴つたりだなと思いながら病院を後にした時、ふと自分の革靴がだいぶ磨り減っていることに気づいた。

どこかで靴を新調し、今日はそのまま帰宅しようと思つた。

…ふと篤紀はあることを思い出した。

昨日の同僚の話で、新宿にある若者向けのスポーツ店に行つたがなかなか雰囲気がよく価格もお手頃でラッキーだったと喋つていたことだ。

すぐさま篤紀はその同僚に電話をし、そのスポーツ店の場所を事細かに聞くと、少しだけ駆け足でその店を目指した。

再会

時刻は夕方5時を過ぎ、会社帰りであるサラリーマン達でその店は賑わっていた。

詩衣は入り口のすぐ横にある、3段に並んだネクタイ棚の品数を確かめ商品を補充した。

- 今日の売れ行きもおそらく前年比くらいだろうか -

そんなことを思いながら手だけを動かしていた時、どこか懐かしい顔をみかけた。

彼はネクタイコーナーの斜め右にある、革靴が陳列されているスペースで、少し前かがみになりながらタッセル付きの革靴を眺めていた。

なぜだらう、その男性がとても懐かしく感じたがすぐには誰だか思ひだすことが出来なかつた。

「すみません!」

ふいにその男性が若干興奮気味の声で、右手をあげながら店員を呼んだ。

男性があげた右手からはほどよく筋肉のついた手首と、スーツからすこしほし出たオフホワイトのシャツがのぞいていた。

詩衣は彼のもとにかけより、「こちらのショーズ履かれてみますか…」と言いかけたその時、彼の動きが止まつた。

「ううんだる…不思議に思い彼を見てみる。

彼は詩衣の細い首筋にかけられた社員証をその鋭い眼差しでみた後、
やつと言葉を発した。

「やつぱり…西浦だよな？」

焦燥

その声を聞いて、私はやつと気がついた。男のわりには2音だけ高くしたような、いや…金属音のよつたな声だつた。

「…西浦？」

私の反応がなかつたので不安になつたのだろう。今度は先程よりも少しだけ小さな声で篤紀は詩衣に呼びかけた。

「…久しぶりだね！」

あまりにも急で現実を受け止めるのに必死だった詩衣ことつては、その台詞を絞り出すのが精一杯だつた。

それでも詩衣は、心の片隅にずっと前からおき忘れていた感情が身体のなかから沸々と湧き出てくるのを感じずにはいられなかつた。

—後藤篤紀は、西浦詩衣にとつて初恋の相手だつた—

いや、訂正しよう。10年前…当時は自分が篤紀に恋をしているとはあまりにも幼く自分自身気づいてなどいなかつた。

つまり、今にして思えば詩衣が恋を意識し始めたのは篤紀が最初の相手だつた。

「元気にしてたか？小学校以来だな！」

いつの気持ちがまだついていかないのを他所に、篤紀は右手で髪

を書きあげながら話しあじめた。

やつとのことで詩衣も少し落ち着き、それから一人はお互の近況を報告しあつた。

その間中、詩衣は懐かしさと…ときめきを感じずにはいられなかつた。

池袋西口をパルコ方面へと向かう途中にその喫茶店はあった。雑居ビルの3階にある「砂時計」という名の喫茶店は、マスターがいってくれるクリーマンジャロが売りだ。

篤紀は窓際のソファー席に腰を下ろしていた。

少し冷めた珈琲をすすりながら、窓から見える横断歩道を眺めていた。

土曜日だからだろうか、窓からは子供連れで歩く人が目立つた。

「もう一度、今度はお茶でもどうかな？」

西浦詩衣から誘われたのは、新宿のスーシー店で再会したあの日から一週間後のことだった。

仕事を終え、家に着くとまずシャワーを浴びる。その後キンキンに冷えたビールをこれでもかとこうくらこに一気に飲み干す。お決まりの儀式を堪能している時にその電話はかかってきた。

正直、意外だった。

あの日連絡先を交換したけれどもまさか本当に電話がかかってくるとは思つてもいなかつた。

というのも、篤紀の記憶だと詩衣はどちらかといえば受け身なタイプの女の子だったからだ。

綺麗に雑草が抜かれた小学校の校庭で、6年1組の生徒はよくドッジボールで遊んだ。

いつも自分から友達を誘い一番に校庭に向うタイプの篤紀に比べ、詩衣は誘われるのを待っているような子だった。

だからだろうか…今、詩衣の方から誘われてここに座つて彼女を待つているのに少し違和感を感じた。

そんなことを考えながら、珈琲をもう一杯おかわりしようとマスターの方を向いた時に、ウッド調の扉にかけられたベルが鳴った。

「すうじー！そんな偶然なかなないよー。」

休憩所に興奮気味な知里の声が響く。

「… そうかな？」

ややおつとりとした口調で、そしてちょっとほにかんだような表情を浮かべながら詩衣は返事をした。

「絶対そうー。運命だよ運命…早く次合つ約束とりつけなよ、鉄は熱いうちに打てって言うじやん」

せっかちな知里がそのように促がしたことで、詩衣の篤紀に対する気持ちはどんどん膨れ上がった。

運命だなんて信じていなければ、詩衣にとって知里のその言葉は満更でもなかつた。

小学校の頃から何も変わつていない優しい笑顔だった。

見た目は幾分か大人っぽくなり、男らしさが増したせいか見慣れないものがあつたが、あの笑顔だけは詩衣が好きだったころのままだつた。

「知里の積極的な性格のおかげで今日会える約束ができたのだから、今度パスタでも奢らなきやなー

そんなことを考えながら詩衣は喫茶店までの道のりを足早に歩いていった。

シフォン素材の白いスカートがふわりと揺れた。

ウッド調のその扉を開けると、すでに篤紀の後ろ姿があった。詩衣は髪が乱れていないか手鏡で確認し、せつと薄ピンクのトートバッグにしました。

「待たせちゃったかな？篤紀くん早いね！」

言いながら詩衣は篤紀の向かいのソファーに腰を下ろした。

「…西浦！生憎、女性は待たせない主義なんだ」

篤紀の瞳がイタズラに光った。

こんな聞いていて小っ恥ずかしくなるような

台詞をさらっと言えるのは、おそれらしく篤紀くらいだろう。

「今日、意外だった。まさか西浦から連絡くるとは思わなかつたからや」

「…そうちかな？」

詩衣は自分の頬が赤く染まつていいくのがわかつた。

照れ臭くなり必死で次の話題へと会話を移した。

「こによく知つてたね。私は同期の子に連れられてよくこの辺で遊んでるんだけどさ」

篤紀は一瞬、虚をつかれた。

篤紀にとってこの喫茶店は忘れられるはずのない場所なのだ。

「ああ、大学が池袋だったから…この辺は割と土地勘あるかな」

篤紀がふいに窓の外を眺める。
その視線を追い詩衣も窓からの光景に目をやる。

駄々を捏ねたものわかりの悪い子供の手を引っ張つて、歩いている
母親の姿が目に入った。

表情

詩衣にとつて、篤紀と話している時間はあつとう間だった。例えて言つとすれば…朝起きて顔を洗つ時間くらい。それは本の数分の出来事のように感じた。

その間に一人は数多くのことを話した。浅井先生が結婚したこと、クラス一悪ガキだったタツちゃんが校長先生に怒られ大泣きした時のこと…。

同じ時間を過ぎじてきた一人にとって、話題は溢れんばかりにあるのだ。

ふと、一瞬会話が途切れた後、篤紀が思つてもよらぬ言葉を発した。
「動物園でも行こつか」

「は…？」

しまつた…せめて「え…？」と言つべきだった。それくらいビックリした。驚きの感情が、表情だけでなく声にまで伝染してしまったのだ。

篤紀は一瞬戸惑いの表情を浮かべたが、すぐ様につものひょうひょうとした口調で話しあ始めた。

「お前、はつ…？って。はは。嫌かな？」

「嫌じやないよ。嫌な訳ない」

篤紀はまた窓からの景色を眺めた。日が暮ればじめている。きっと今日は満月だ。

「昔や、クラスで飼つてたウサギ…西浦飼育登板の時いつも楽しうに餌あげたよな。」

「嬉しかった。」

次の約束が出来たこと。篤紀から誘ってくれたこと。
しかしそれ以上に、篤紀の思い出の中に確かに自分が存在したこと
に言葉では言い表せないような感情を抱いた。
そして、自分でも忘れていたような出来事を覚えてくれていたこと
がたまらなく嬉しかった。

「じゃあ、動物園…次の約束ね！」

その言葉に頷くと、篤紀は髪をかきあげそして優しく微笑んだ。

帰路に着く途中にある歩道橋を登ると、そこからオレンジ色の夕日
が自分を応援してくれているかのように美しい光を放っていた。
詩衣はしばらく夕日を眺めた。

そして踏み出した一歩は、すぐさま影にのみ込まれていった。

奇跡

季節はすっかり移り変わつて、朝起きた時の寒さが一層厳しさを増してきた。

青森ではこの季節、当たり前のように雪かきをしている人々が目に付くが、東京ではその様な光景を見ることはあまりない。代わりに田に入るのは、街にこれでもかと言わんばかりに飾り付けられたクリスマスの装飾だろうか。

詩衣とはほぼ毎週の様に会つている。詩衣と会うと嫌なこと全てを忘れられる気がした。

靴したに穴が開いたといつ小さなことから、過去の辛い失恋まで全てのことを…だ。

それが何故なのか、篤紀なりに考えてみた。

おそらくきっと、篤紀といふときの詩衣が余りにも幸せそうな顔をするからだ。

自分がこんなにも幸せそうな顔をさせてあげてるのだ、と悦^{えつ}に漫れる。

そんな感情にどっぷり漬かるのは、それほど悪い気もしない。

12月25日。

今日も篤紀は詩衣と時を過ごしていた。外苑の銀杏並木も今日はすっかり純白が似合つイ
ルミネーションと化していた。

「地元だとさ、クリスマスに雪が降るなんて当たり前。むしろ大雪

で外に出ようなんて思わない…それがこっちだとこんなに人が「」つ

た返してるんだもんな。不思議だな」

その言葉を聞いて、詩衣は微笑んだ。手にはこんな日によく似合う

真っ赤な手袋がはめられている。

「ほんと、カッフルばかりだね」

言い終えた後、詩衣は少しだけ羨ましそうな眼差しを篤紀に向けた。

篤紀はその視線にドキッとした。これがクリスマスの魔法だろうか。

詩衣を喜ばせたい。そうすればきっと、自分も幸せになれるんだ。

そう思い篤紀は自分の想いを言葉にのせた。

「はたからみれば俺ただってそう見えるだろ…何なら本当にそういう？」

早く詩衣の反応が知りたい。先走る気持ちを抑えようと息を吐く。濁りもなく真っ白だ。

次の瞬間、詩衣の瞳に溢れそうなほど涙が浮かびあがつた。それは詩衣の白い肌をより一層引き立たせた。

篤紀は詩衣の柔らかく細い肩を後ろから抱きしめる。

「泣くな！」

少しはにかみながらそう言い放った時、掌に水滴が滴った。詩衣の涙だろうか、それとも一人を祝福するかのようにタイミングよく粉雪が落ちてきたのだろうか…。

12月25日。

東京でも珍しくホワイトクリスマスとなつた。

その日は詩衣の24回目の誕生日だった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7833y/>

微笑みの詩

2011年11月27日14時56分発行